



TITLE:

【部局史編 1】 第1章: 総合人間学部

AUTHOR(S):

京都大学百年史編集委員会

CITATION:

京都大学百年史編集委員会. 【部局史編 1】 第1章: 総合人間学部. 京都大学百年史: 部局史編; 1 1997: 2-33

ISSUE DATE:

1997-09-30

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/152983>

RIGHT:

第1節 総 記

第1項 学部の概要

本学部は、平成4(1992)年10月1日に法令上設置され、平成5(1993)年4月に第1期生を迎え入れた、京都大学で最も新しい第10番目の学部であり、入学定員は130名である。

新学部を「総合人間学部」と名づけた理由は、本学部の研究・教育が、各専門分野に限定された個別的な研究・教育を超え、自然と調和した人間の全体的形成を目標とするものだからである。

「総合人間学」とは、人間存在を、人間の内面的な心理とか価値や思想の面、あるいは身体面からだけではなく、人間の置かれた社会、政治、経済、文化、歴史環境、さらには、物質や生物などの自然環境との関係を含めて、総合的に理解しようとする学問である。

現代社会に生きる人間が、人間自身とその人間の形成した文明とを最大の問題として探究しなければならないのは、この探究にこそ、これから人類存在の可能性が賭けられているからである。このような人類生存や文明の可能性という根本問題を解明していくには、これまでのように限定された狭い分野での教育・研究を進めるだけでは、もはや不可能となりつつある。つまり人間と、人間を取り巻く世界とを、総体的にとらえていく新たな学問的営為を確立することが重要であり、それこそが、総合人間学部における教育・研究に求められている課題である。京都大学の自由な学風と伝統の上に立っ

* 扉の写真は、総合人間学部A号館。

て、従来の個別科学の枠を超えた、より多様で総合的な学問の場となることを本学部は目指している。

また本学部では、広い視野を持ち創造性豊かな人間を育成する目的で、副専攻制度を設ける。これは各自が分属する講座ないし分野での主専攻のほか、異なる学問分野を系統的に履修することによって幅広い知識を身につけるための制度である。副専攻を選択し、所定の単位を修得した場合は、卒業の際に、学士学位記とは別に副専攻を明記した認定書が発行される。

自然と人間の調和した発展の可能性を探究するためには、専門諸科学による各領域の精密な分析的研究とともに、その研究成果をもとにして、自然と人間とがそれぞれ統一体として機能し互いに調和し合うことのできる条件を、総合的・全体的に明らかにしなければならない。このような自然と人間全体の総合的把握という課題に応えるため、本学部には、人間存在の総合的研究を行う「人間学科」、自然環境の総合的研究を行う「自然環境学科」が設けられている。

また、現代世界の大きな特徴は、その未曾有の発展およびそれに伴って惹起された困難が、ともに科学・技術の著しい進歩を根本原因としていることである。科学・技術の基礎的枠組みとなるのは、数理的自然科学および情報科学である。したがって、このような数理的自然科学および情報科学のよって立つ基盤を、その歴史と原理の両面から総合的に探究することは、人類文化に新たな展開をもたらす知的地盤を提示することになろう。このような目的を持って、本学部には「基礎科学科」が設けられている。

現代世界のもう1つの特徴は、国際化である。社会・経済の発展と交流手段の発達によって、接触と対話が地球的規模で拡大されてきた結果、文化の多様性と共通性、すなわち文化の国際性が至る所で認識されざるを得なくなった。国際性の認識を欠いて、人類文化に今後の豊かな発展は期し難い。研究・教育の焦点を、このような文化の普遍的次元と地域的多様性とに合わせるために、本学部には「国際文化学科」が設けられている。

各学科、講座、分野、および学科と講座との相関関係は表1-1および図

第1章 総合人間学部

表1-1 総合人間学部の学科・講座・分野表

(平成6年現在)

学 科	講 座	分 野
人 間 学 科	人間基礎論講座	人間存在論 人間関係論 創造行為論
	生活空間論講座	生活空間構造論 社会システム論
国際文化学科	文化構造論講座	文化原論 文化人類学
	文明論講座	文明形成論 現代文明論
	言語文化論講座	言語記号論 文 芸 論
	日本・中国文化・社会論講座	日本文化・社会論 中国文化・社会論
	欧米文化・社会論講座	東欧圏文化・社会論 西欧圏文化・社会論 アメリカ圏文化・社会論
基 礎 学 科	数理基礎論講座	数理構造論 数理現象論 空間現象論
	情報科学論講座	数理情報論 人間情報論 計 算 理 学
	自然構造基礎論講座	粒子・宇宙基礎論 物性基礎論
自然環境学科	物質環境論講座	物質構造論 物質機能論
	生物・地球圏環境論講座	地 球 科 学 生 物 科 学
	環境適応論講座	生体適応論 運動適応論

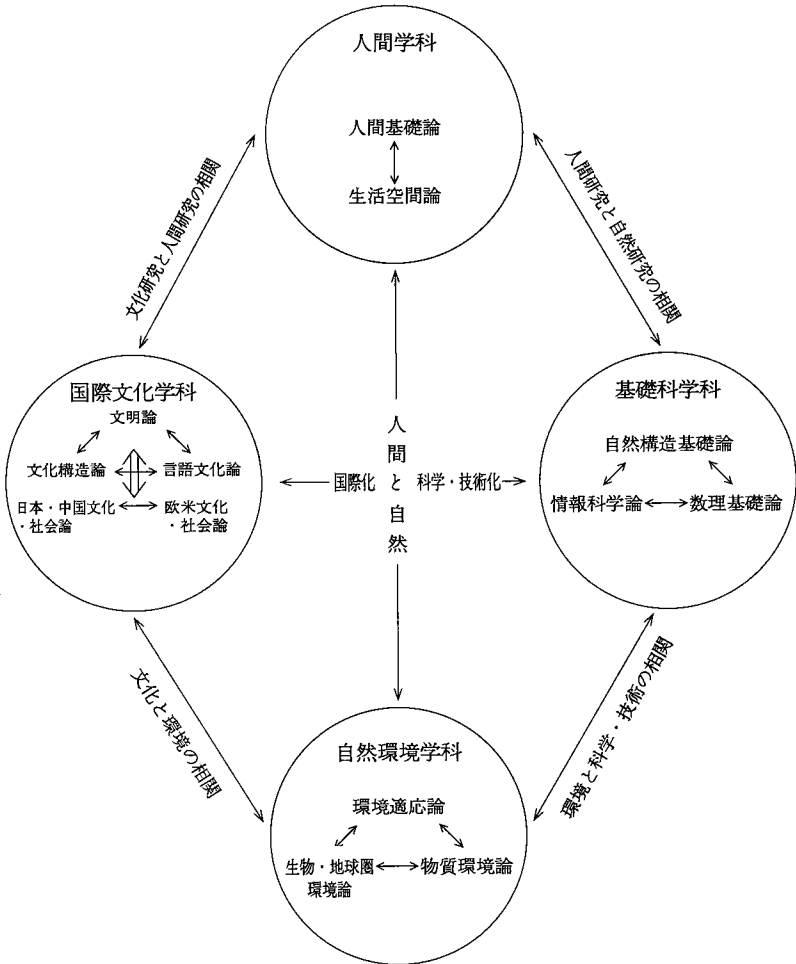


図1 1 総合人間学部 of 学科・講座相関図

第1章 総合人間学部

表 1-2 総合人間学部教職員数

(平成6年9月30日現在)

教 員					職 員*	総 計
教 授	助 教 授	助 手	外国人教師	小 計	131**	303
75	71	19	7	172		

注 * 大学院人間・環境学研究科を含む。

** 定員内職員76名、定員外職員55名。

1 1のとおりである。

総合人間学部を構成する教職員および学生数は表1-2のとおりである。
平成5(1993)年度の第1期入学者数は133名(男子112名、女子21名)である。

管理運営機構は教養部から総合人間学部への改組とともに、大幅に改められた。教授会構成員は他学部の例にならって、教授および助教授となった。学部の管理運営を協議する運営委員会が新設された(平成6年9月に学科長会議に改編)。その他、常設の機関として人事会議、財政会議および各種の委員会が置かれることになった。各種の委員会は、主として学部の日常業務を担当するⅠ類委員会、専門的知識を要するかまたは全学委員会と関連するⅡ類委員会、その他のⅢ類委員会からなる。

次に全学共通科目についてふれておく。平成3(1991)年7月に大学設置基準が改正され、「一般教育科目」と「専門科目」の区分を廃止することが可能となった。京大では既に平成元(1989)年1月に、4年一貫(医学部では6年間)の教育課程に刷新することが提案されており、大学設置基準が改正されると同時に京都大学教育課程等特別委員会が設置され、平成4(1992)年9月に「総合人間学部が、全学的な協力体制の構築を基本に、全学共通科目の主要な部分を提供し、全学の高度一般教育の実施に責任をもつ」との報告が出された。この報告を受けて、平成4(1992)年11月に総長を委員長とする京都大学教育課程委員会が設置され、同委員会は「京都大学における高度一般教育を、総合人間学部を実施責任部局として全学的協力のもとに円滑に行うため」に「全学共通科目をめぐる全学的企画・調整・運営を行う」恒常的な機

関となった。総合人間学部の設置に伴い、平成5(1993)年度より、旧教養部の授業科目が全面的に改訂されるとともに、多様で高度な全学共通科目が総合人間学部から提供されることになった。従来の授業科目名は、文学、数学、物理学など学問分野の名称であったが、新しい授業科目名には講義内容をよりの確に表す名称が付けられることになった。また、各学部、研究所およびセンター等からも全学共通科目が提供されることになった。これらの中には、各学部の専門科目に指定されているものもあり、高度一般教育と専門教育を有機的に組み合わせていく上での新しい試みもなされている。以上の経緯により、全学共通科目の授業の大部分は総合人間学部で行われるが、一部の授業は他の提供部局で行われる。

第2項 沿革と現状

本学部の母体は教養部であり、教養部の歴史については第14章(旧)教養部を参照されたい。

教養部では、ここ四半世紀余りの間に、学生数・建物・教官数の各方面にわたって急速な拡大を遂げてきたが、その反面、キャンパスや受講生の過密化など、多くのマイナス面が生じたことも否定できない。さらに、もともと一般教養課程を4年間の学生生活の前期2年間に限定するこれまでの制度が、本来の一般教育の理念から見て適切かどうかとも問題であった。専門課程と高



写真1-1 構内自転車雑踏

第1章 総合人間学部

校教育との狭間に置かれた教養課程の教育は、学生側からも教官側からも、通過的な過程ととらえられがちであり、そこに独自の教育的意義を見出すことは困難な制度である。また、教養部は、人文科学・社会科学・自然科学の広汎な領域にわたる豊富な教官スタッフを擁しながら、単なる教育機関という制度的位置付けを与えられているために、他の教育・研究機関に比し、教官の研究条件において多くの改善されるべき問題を抱えていたことも事実であった。

そのために、あらためて教養部の出発点である一般教育の理念を見つめ直し、全学的な教育体制の問題として、教養課程と教養部制度の大胆な改革を図ることが要請されることになった。このような改革を課題として、全学的な構想委員会と教養部内の委員会とが十数年にわたる討議・研究の末、総合人間学部設立とそれに伴う教養課程教育の改革、および大学院としての人間・環境学研究科の創設という3案による、教養部の抜本的な改革案を提出し、この案は評議会において承認された。

総合人間学部の創設は、これまでの諸学部で行われてきた個別的専門教育・研究ではなく、それらを総合して現実を全体的にとらえ、これに指針を与え得るような、総合的教育・研究の場を、新学部に求めようとするものである。総合人間学部は、人文主義的教養や単なる総合的教養の枠を超え、「自然と人間との新たな全体的調和」という全体的理念に導かれることによって、21世紀に向かって新しい文明と人間性の可能性を開き得るような、新たな教育・研究の場を創出するものである。本学部の具体的内容は先に記したとおりである。

教養課程教育の改革としては、自然と人間の調和を理念として統合された、総合人間学部の専門科目群を用いて、副専攻や一般教育科目への「読み替え」を行うことにより、これからの文明を担う学生に対して新しい意味での高度な一般教育科目を行うことになる。また、主として本学部の教官によって提供されるその他の一般教育科目や外国語科目等(全学共通科目)も、自然と人間の調和や普遍的・個別的な国際文化の理解といった観点から、新し

い一般教育科目を提供することになる。本学部が創設されたことによって、京都大学全体の学生に対して従来の教養課程と専門課程との区別を廃した4年一貫教育が可能となった。

総合人間学部は大講座制による博士講座として設置されたものであるが、平成6(1994)年9月時点では2回生までが在籍するだけで、独自の研究科は当然のことながら設置されてはいない。しかし、独立研究科の人間・環境学研究科には総合人間学部より64名の教授および助教授が専任教官として協力講座に参加して、大学院教育に直接携わっている。したがって、総合人間学部の完成年度以後には、学年進行による独自の研究科設置をも含めて、人間・環境学研究科と総合人間学部の大学院教育は密接な連携と協力関係を築いていくことが必要であろう。総合人間学部の大学院教育のあり方について制度的にいかなる形が適当であるか、平成5(1993)年11月にⅢ類委員会として将来計画検討委員会が設置され、この問題の検討を進めている。

第3項 附属施設

総合人間学部の施設としては、図書館・語学実習室・情報処理演習室などが挙げられる。

1. 図 書 館

昭和48(1973)年に新築された図書館は、1階と2階合わせて502席の閲覧室・開架図書室・新聞室・視聴覚室・休憩室等を備えている。1階にある開架図書室には、新刊書や利用頻度の高い図書約4万5,000冊が置かれ、ほかに辞書や事典といった参考図書も約5,000冊置かれている。書庫内には第三高等学校時代から引き継いだ図書を含め25万冊余りの図書や雑誌が所蔵されている。また、各教官研究室等にはそれぞれの研究に結び付いた図書が所蔵されている。これらを合計すると総合人間学部全体の蔵書数は平成5(1993)年度末で50万冊に達した。視聴覚室にはLL学習のできるブース12席が設け

第1章 総合人間学部

られ、備え付けの38カ国語の語学学習用のテープを利用できる。また、視覚障害者のために拡大読書器が備え付けられ、対面朗読コーナーも設けられている。新聞室には国内主要紙と英独仏中露の各1紙が備え付けられている。「舎密局～三

高資料室」には教養部の前身である舎密局から第三高等学校に至る貴重な文書類が保存されている。



写真1-2 図書館外景

2. 語学実習室(Language Laboratory)

現在の設備は、5ラボ室とスタジオ・調整室である。A322教室はフルラボ80席、A321教室はフルラボ64席、A323教室は簡易ラボ62席、A301教室はフルラボ64席、A101教室はフルラボ80席を備える。スタジオ・調整室にはビデオ撮影・編集のためのAV機器一式(教材編集装置、特殊効果装置、ビデオカメラ2台、ビデオデッキ5台、モニターテレビ3台、衛星放送受信装置一式等)を備える。

3. 情報処理演習室

現在、2つの演習室に合わせて114台のUNIXワークステーション(日立3050)が置かれ、KUINS(京都大学統合情報通信システム)に接続され、インターネットにつながっている。これ以



写真1-3 演習室内

外に、レーザープリンター 2 台が付設されている。以上の諸設備は現在学内では情報処理教育センターの設備に次いで大規模な情報処理教育施設となっている。

114 台のワークステーションは、センターの第 4 期システム更新のときに導入さ

れたもので、高解像度のカラーディスプレイ、32MB のメモリー、大容量のハードディスク、3.5 インチ FD ドライブを備えている。



写真 1-4 グラウンド

4. そ の 他

総合人間学部構内の西半分には野球のできるグラウンド、テニスコート、バレーコート(平成 5 年 7 月廃止)などがあり、体育実技の授業やスポーツ活動のための格好の場となっている。

第2節 研究の現状

第1項 人間学科

これまで、人間は自然に適応しつつ、自然を自らのために役立て利用する存在であるとされてきたが、科学技術による地球環境の破壊は、このような従来の人間観によっては律しきれない問題が人間の中にあることを露にした。本学科の人間学は、従来の人文・社会・自然科学といった枠組みにとらわれることなく、より総合的で根源的な人間存在の学を21世紀の人類社会のために、創り出していくことを目標にしている。

1. 人間基礎論講座

本講座の目指すところは、人間学科人間基礎論講座の名前が示すとおり、そもそも人間存在が可能となるための基礎・基底とは何であるか、という人間の根本問題を、従来の伝統的な学問分野としての、哲学・倫理学・科学論・社会学・教育学・精神医学・美学・芸術学・文学といった枠組みを離れて、もっと自由に根源的な観点から、すなわち、「人間存在」「人間関係」「創造行為」という3つの観点(分野・専攻)から究明しようとするものである。

もとより、人間は、孤立した単一の存在ではなく、人間社会と自然環境とに囲まれつつ生きなければならない相互関係的存在であり、あるいは外界と常に知覚的・行動的に関わる志向的存在である。さらにまた、人間自身ならびに人間がその内に置かれている社会や自然をも超えた象徴的世界を創造(想像)することによって、そこに自己の充足する世界を見出さんとする自己

超越的存在である。こうした人間存在の本質を、その根源的・総合的・全体的観点から、人間・社会・自然諸科学の知見と方法を駆使しながら解明し、21世紀の人類の生存に希望を与えるような人間・社会・自然像の確立を図ることが、本講座の究極目的である。このように、人間基礎論講座では、「人間とは何か」という伝統的な問いを、現代にふさわしい総合的普遍的な学問研究の対象とする。

a 人間存在論分野

人間存在論分野は、旧来の伝統的な学問名で呼べば、広義における「哲学」に相当するものであるが、総合人間学部人間学科人間基礎論講座における人間存在論分野は、そうした旧来の知見や観念にとらわれることなく、自由な精神の発露としてのまっさらな思惟と意欲によって、人間の尊厳にふさわしい、21世紀に耐えうるような、新たな人間像・世界像の確立を目指して、独創的な学問研究を究極目標とするものである。本分野は、哲学の諸分野の区別や枠組みを取り払って、それらの根底に通ずる普遍的なもの、全体的なものを、「人間存在」の名のもとに探究しようとするものである。

磯江景孜教授は、現象学と非分析的言語哲学を基礎にした人間存在の社会性・歴史性の解明に関心を向けている。有福孝岳教授は、カント哲学を中心に、ドイツ観念論、ニーチェ、ハイデガー等の哲学を研究している。富田恭彦助教授は、言語哲学、科学哲学および西洋精神史を専門としている。

b 人間関係論分野

人間社会の具体的諸事象の観察を通じて、人間関係を1つの多次元的構造として把握する。制度、身体、無意識、さらには逸脱の可能性をも含んだこの構造の内で、主体的な人間精神の形成はいかにあり得るかを考察する。

高橋三郎教授は、極限状況下における人間行動への関心から軍隊と戦争についての社会学的研究を行っている。岡田敬司教授の研究領域は、教育学・教育人間学である。高橋由典助教授は、感情現象を理論的に把握する研究を行っている。

第1章 総合人間学部

c 創造行為論分野

人間の創造行為の全体を展望し、現代芸術の観点から見たジャンル論、芸術史学、芸術思潮、芸術交流等の多様な芸術観を探究することによって、社会や歴史の中における人間の創造行為の本質は何かを考察する。

鳴原眞一教授は、人間の創造行為を伝統的な演劇やオペラから実験的なダンスやシアター・ピースまで、ジャンルや国境などの領域を超えて研究する。内藤道雄教授は、表現主義芸術を研究対象としている。村形明子教授は、E. F. フェノロサとその周辺に焦点を絞り、未公刊資料の発掘・編集に重点を置いて日米文化交流の諸相を研究している。四日谷敬子教授の専門は、哲学的美学であり、とりわけヘーゲル美学の「芸術の終末のテーゼ」との対決を課題とする。依田義丸助教授は、イギリス演劇、特にシェイクスピアを主な研究対象としている。加藤幹郎助教授は、表象文化一般、とりわけモダニズム以降の小説(ジョイス、ベケット)、文学批評理論および映画史・映画理論を研究対象としている。岡田温司助教授は、西洋美術史、特にイタリア・ルネサンスの文化・美術を専門としている。篠原資明助教授は、ロマンス語圏を中心とした西洋の美学思想史および交通論美学を研究している。メニル(E. Mesnil)外国人教師は、芸術分野における西欧と極東の交流、その歴史・宗教・哲学上の諸問題を研究している。

2. 生活空間論講座

生活空間を、人間の生活する場、社会システムの展開する場としてとらえると同時に、そこで生活する人間の空間に対する関わり、ならびに生活空間の構築など、主体のあり方との関連の中でとらえる。また自然システムや国際関係との相互作用をも念頭に置きながら、社会諸システム各々の運動様式と、相互間の関連の解明を通じて、下位の生活空間から上位の生活空間に至る全体の構造を究明し、人間的な生活現実の相対的研究・教育を行う。

a 生活空間構造論分野

生活世界が、いかに客観的に成り立ち、またそれが人間によっていかに生

きられ、形成・構成されるかを、地理学や建築学、そして人間諸科学を含めた学際的方向で考察する。同時に、あるべき地域計画の道を究明する。

山田誠教授は、人文地理学の立場から近・現代の都市的生活空間(都市とその周辺地域、および都市内部地域)の研究を行っている。

b 社会システム論分野

本分野は、従来の社会諸科学の知見を踏まえつつ、また自然システムや国際関係との相互作用をも念頭に置きながら、社会諸システム各々の独自の運動様式と、相互の間の関連を有機的に解明しようとするものである。

吉田忠教授は、統計調査と統計資料、および数理的方法によるその利用が経済学の実証的研究で果たす役割に関する方法論的研究を行っている。長屋政勝教授は、ドイツを舞台にした社会統計学の歴史的展開を、特に認識論派と呼ばれる系譜に焦点を当てて研究している。宮本盛太郎教授は、比較政治思想史的方法を用いて、近代日本政治思想史を研究している。西村健一郎教授は、労働法・社会保障法を専攻している。山下清助教授は、将来の不確実性、経済主体間の情報の非対称性、取引費用が存在するときの取引主体の経済行動や経済メカニズムを研究している。高橋眞助教授は、民法を専攻し、特に損害賠償法および金融法を研究している。

第2項 国際文化学科

国際化が全地球規模で進み、国家・地域間の交流、相互依存の関係が深まるにつれて、世界各地の社会と文化に関して、一層高度の理解と緻密かつ総合的な研究が必要とされるようになった。本学科はそのような観点に立ち、世界の多様な社会・文化の形成過程とその構造を共時的・通時的に考察し、おのおのの独自性を解明するとともに、比較文明論的視点を取り入れ、また特に日本の社会・文化との関係にも留意しつつ、それらの共通性・相関性を総合的に把握しようとする。またそのことを通じて、日本文化の独自性とその普遍的価値を明らかにすることができれば、世界における日本理解の

促進に貢献することができるであろう。

1. 文化構造論講座

人間は常に関係の中で人間となる。人間と環境の相互関係には、まず人間対自然の生態系的相互関係があり、また人間対人間の持つ社会系的相互関係があり、さらに人間と文化事象との間の文化系的相互関係がある。このことを文化構造の動態的考察や比較文化的研究を通じて明らかにする。また同時に人類学的視点に立って世界の諸民族の文化と地域社会の関係を明らかにすることによって、文化を支える自然的・社会的・歴史的諸基盤の解明を目指している。

a 文化原論分野

文化とは何かという、人間存在にとっての根本問題を、単なる主観的議論に終わらせることなく、価値観や言語・象徴・記号などの観念体系から、情動的表現、風俗、物質的構築に至るまで、理論的かつ実証的に考察する。

山口裕教授は、20世紀のドイツの小説形式の変遷が研究対象である。平野嘉彦教授は、近代ドイツ語圏の諸都市を、都市論の視点からより広義のテクストとして読み取るべき方法論の構築を目指している。鈴木雅之助教授は、18世紀のイギリス文化が主たる研究対象である。蒲池美鶴助教授は、エリザベス朝演劇を中心に「言葉」と「仮面」の象徴性を研究している。ベッカー(C. Becker)助教授の専門は比較思想史、比較宗教学である。トラウデン(D. Trauden)外国人教師は、ドイツの中世演劇を研究対象としている。

b 文化人類学分野

多様な諸文化を体系的、統一的に把握するための科学として発達してきた文化人類学は、単純な文化要素からなる諸民族の研究から出発したが、近年では、都市社会を発達させた諸民族、諸国民の研究にまで及んでいる。文化人類学全体の様々な研究領域、研究方法に論及する。

福井勝義教授は、認識人類学的研究をはじめ、自然と文化の重層性や民族の相克と生成に関する実証的研究に取り組んでいる。菅原和孝助教授は、ア

フリカの狩猟採集民社会を主なフィールドとして、対面相互行為と社会関係に関する研究を進めている。

2. 文明論講座

現代文明は、西欧文明と非西欧的な諸文明がそれぞれの多様性を保持しつつも、相互作用を密にし、1つの地球文明を形成する段階に入ってきている。このような文明の現状と、これを形作った過去の文明形成の論理を解明することは、人間存在それ自身の可能性を探究することにはかならない。本講座では、多様な要素・要因から生成している様々な文明を、その形成と変遷、および現代文明の全体的布置という2つの視点から、総合的に考究することを目指す。

a 文明形成論分野

国家・文化圏の境界を超えて、古代文明の誕生から現代に至る諸地域の文明の形成過程とそれらの相互関係について、文化・社会の両面にわたり、比較文明論的方法を用いて総合的な考察を行い、将来の展望を切り開くことを目指す。

石川光庸教授の研究分野は、ゲルマン語学・文学、およびドイツ語史である。尾野照治助教授は、中世ヨーロッパの人々の心的構造を解明することに努めている。高津春久教授は、中世ヨーロッパの宮廷社会を背景に成立した宮廷叙情詩のテキストの解明を目指している。櫻井正一郎教授は、主にイギリスのルネサンス詩および現代詩を研究している。高谷修助教授は、18世紀のイギリス文学を主要な研究対象としている。丸橋良雄助教授は、シェイクスピアの喜劇を主な研究対象としている。水野真理助教授は、ルネサンス期の英文学を主な研究領域とする。山本淳一教授は、ヨーロッパ中世文明を主な関心の対象とする。ヨリッセン(E. Jorissen)助教授は、日欧交渉史を専攻する。六反田収教授は、ルネサンスの詩を主な研究対象とする。ノイマン(B. Neumann)外国人教師は、中世のドイツ文学、特に中世の演劇を研究している。ラローズ(J. Laloz)外国人教師は、現代日本と文学の研究と翻訳を

第1章 総合人間学部

通して、その海外への紹介に取り組んでいる。

b 現代文明論分野

ここ数世紀にわたり、「進歩」を重ねてきたヨーロッパ文明は、既に幾度かの危機に達着して、将来も規範的な文明であり得るかを、その度に疑われながらも、なお存続している。のみならず、アジア・アフリカ・ラテンアメリカ諸国も、自身の独自性を生かすことよりも、むしろヨーロッパの後を追うことを余儀なくされ続けているのが現状で、そのためヨーロッパ文明は規範的な現代文明としての地位を、当分は譲ることはあるまい。しかし、外在的な批判者が欠けていけばいくほど、必要となるのは内在的批判である。これを欠いては、現代文明にはらまれる諸矛盾が、人類の幸福の方向へ解決していくことは、望まれない。

本分野は、哲学、社会学、歴史学、経済学、文学等々の知見を結集して、現代文明の、一方では、現時点に至る歴史的過程を総体的に考察し、また他方では、様々な個別的事象を精細に考究することにより、現代文明の有効な内在的批判へと向かうことになるう。

池田浩士教授は、ナチズムや天皇制の支配下でのドイツや日本の文学・芸術・文化のあり方を再検討している。小岸昭教授は、最近ではスペイン系ユダヤ人「セファルディ」および改宗者「マラーノ」の問題を研究対象にしている。佐伯啓思教授は、現代日本の経済的成功の意味を検討することを当面の課題としている。田邊玲子助教授は、18世紀の文学現象(雑誌・小説・教育書等)に注目し、特に「女」と「男」を囲い込む言説の体系を研究対象としている。

3. 言語文化論講座

本講座は、人間および人間の生み出した文化を、言語の側面から研究・理解することを目標とする。人間を動物から分ける言語とは何であるか、という問題に始まり、なにゆえに言語が人間の精神文化の最も高い部分の担い手になり得るか、という問題にまで、われわれの関心の範囲は広がる。このよ

うな観点から、本講座は、記号体系としての言語を考察する言語記号論分野と、広い意味での文芸を研究対象とする文芸論分野の2分野からなる。

a 言語記号論分野

人間の自然言語は、音声と意味と構造とが相互に関連している文法という記号体系と、その他の認知体系の相互作用の産物である。また言語は、長い歴史を経て生み出されたものであり、人間の脳が習得したものである。言語は人間の知的営みの重要な部分を占め、文化の中で大きな役割を果たしている。本分野では、そのような言語を、英語・ドイツ語・フランス語を主な対象として多角的に研究することによって、人間理解に一步でも寄与することを最終的目標とする。

西本美彦教授は、ゲルマン語学・比較言語学を主要な研究対象とする。水光雅則教授は、英文法、特に音韻論と統語論を土台にした一般文法理論を専門領域とする。大木充助教授は、フランス語の統語構造の機能主義的観点からの研究を中心とする。東郷雄二助教授は、フランス語の機能的・認知的観点からの研究を中心としている。

b 文芸論分野

文芸、すなわち広義の文学を中心的な研究対象として、特に言語の芸術的な機能に着目しながら、主として英語・ドイツ語・フランス語による文芸作品を、個別にあるいは比較研究的に考察し、文学の基礎的原理や言語の持つ高度な機能・特性を究明していく。

山本利治教授は、J. オースティンに至るまでの18世紀イギリス小説と、その形成過程を主な研究領域とする。渡邊久義教授は、小説の言語・文体という面から、ヘンリー・ジェームスなどの小説家に関心がある。田口義弘教授は、詩人ライナー・マリア・リルケの研究を主要テーマとしている。稲田伊久穂教授は、現代ドイツ文学、なかでも19世紀末から20世紀前半にかけての抒情詩を主な研究領域とする。三原弟平教授は、プラハ生まれのユダヤ系作家フランツ・カフカとその周辺を、現代芸術の大きな思潮の中で考察している。三好郁朗教授は、19、20世紀の詩、特にフランス象徴詩派、シュルレ

第1章 総合人間学部

アリスムを主な研究対象とする。松島征教授は、フランス文学に限らず、文芸理論一般を記号学とレトリック(修辞学)の観点から研究している。福岡和子教授は、アメリカ19世紀の小説ならびに文学批評理論を主な研究領域にしている。若島正助教授は、20世紀の英米小説を主な研究領域とする。道旗泰三助教授は、ドイツ17世紀バロックを含むアレゴリー文学、アレゴリー表現の問題を扱っている。大川勇助教授は、オーストリア生まれの作家R.ムジールを中心に、主として20世紀のドイツ文学・思想を研究している。ブラッドショー(G. E. R. Bradshaw)外国人教師は、特にシェイクスピアとその時代の思想について関心がある。

4. 日本・中国文化・社会論講座

日本および中国の言語・文化・政治・社会、あるいは生活・思想・宗教の個性とその歴史的特質を、深く個別的に、かつ広く総合的、相互関連的に研究することを目指す。本講座は3つの軸を持つであろう。それは「日本研究」および「中国研究」における総合科学性、つまり従来の哲学・史学・文学の区分を超えた方法論の追求、さらに研究方法上での実証性・客観性の強調、そして第3に日本と中国の歴史的・文化的な関わりの中で同質性と異質性を明らかにすることである。

a 日本文化・社会論分野

日本における「日本研究」は、日本とは何かということ、その文化的個性の自覚的な究明を目的とするものでなければならない。同時にそれにはアジア史、広くは世界史の観点に立った比較研究が必要であり、関連諸講座との有機的な交渉が要請される。

川端善明教授は、国語学、特に文法論を専門とする。菌田稔教授は、宗教学的観点からの日本文化史を専攻する。松田清教授は、洋学史、日欧文化交渉史を専攻とする。内田賢徳教授は、国語学、文法論および文体論を専攻する。島崎健助教授は、中古文学(平安朝文学)の専攻である。西山良平助教授は、日本の奈良・平安時代を研究領域とする。

b 中国文化・社会論分野

アジア歴史世界の中心として、広大な地理的空間と長大な歴史的時間を持つ中国、この中国を多面的に分析することによって、中国の歴史と文化の全体像を解明し、ひいては現代の国際関係の中での役割をも考察する。

愛宕元教授は、中国中世・近世史を研究領域とする。西脇常記教授は、中国古代・中世思想史を主たる研究領域とする。阿辻哲次助教授は、中国文字学を専門とする。赤松紀彦助教授は、元雜劇の形成と発展を研究テーマとする。松浦茂助教授は、金朝史と清朝史を専門とする。

5. 欧米文化・社会論講座

本講座の課題は、ヨーロッパおよびアメリカ合衆国の社会形成・構造、およびその諸文化の歴史・形態・交流について、個々の国あるいは民族における特性と異同を明らかにする一方、日欧米諸国間の比較研究を行うことである。それは、精神風土、文化、社会の地域的研究を行うとともに、通時的な研究を行うことによって達成される。このような研究を通じて、東欧の解放によって急速に一体化の方向を目指している欧米の文化的・社会的統一性を可能にしているものが何かを探究する。このことは、アジアにあってこれらの国々と交流・競争を行わざるを得ないわが国にとって今後重要な課題となろう。

a 東欧圏文化・社会論分野

スラヴ諸民族は言語的に多くの共通点を持ち、政治・経済的にも歴史的・文化的にもお互いに深い関係を結んできたが、現在では統合を求める方向よりもむしろ分離・離反の動きの方が目立つ。これはスラヴの世界が、近代化と民主主義の確立への複雑な過程を冷戦構造の崩壊によって一気に加速させた結果といえる。この大きなうねりは、現在の現象のみに目を奪われていてはその本質をつかむことができない。日本というもう一方の特殊な発展過程を遂げた文化圏の視点から、総合的・比較的・通時的にスラヴの言語と文化との研究を進める。

第1章 総合人間学部

木村崇教授は、ロシア文学を専門としており、主としてロマン主義時代に関心を寄せている。服部文昭助教授は、スラヴ語を研究の対象としている。

b 西欧圏文化・社会論分野

ゲルマン系・ラテン系その他の諸文化の歴史・構造・形態について、個々の国ないし、民族の特性および、他との異同を解明する一方、相互の交流・影響、さらに、他の文化圏への影響をも総合的に研究する。

飛鷹節教授は、19世紀末から20世紀へかけてのドイツ抒情詩の変遷を中心に研究している。佐藤康彦教授は、19世紀および20世紀のオーストリア文学を研究している。川島昭夫助教授は、イギリスにおいて近代という制度が人々の意識、日常の生活、政治と経済の動向の中でどのように形をとって現れてきたかを解明しようとしている。石田明文助教授は、ドイツ近代の思想や文学の基本的構造を解明することを目指している。稲垣直樹助教授は、近代フランス文学・社会の特質をV ユゴー研究を軸として解明しようとしている。松田英男助教授は、19世紀、特にヴィクトリア朝のイギリス小説を研究対象としている。奥田敏広助教授は、近・現代ドイツ文学を専門とする。多賀茂助教授は、主に18世紀フランスの文学・教育・宗教問題を研究している。桂山康司助教授は、ミルトン、ホプキンズなど、独自の表現法を執拗に追究した「孤高」の詩人に関心がある。カンスタブル(J. Constable)助教授は、20世紀初頭の英国モダニストの著作を研究領域とする。モンベール(G. Mombert)外国人教師は、近現代フランス文化・社会を研究している。

c アメリカ圏文化・社会論分野

アメリカ合衆国の文化と社会の歴史・構造・形態を、その成立過程、精神風土・自然環境、言語・文化の展開、政治・経済との関わり等の視点から、通時的・共時的にとらえる。

田中禮教授は、19世紀の詩人ウォルト・ホイットマンを中心にアメリカの自由詩を主な研究対象としている。小畠啓邦教授は、19世紀アメリカの文化と社会、風土と思想の関わり方を探ることを課題としている。丹羽隆昭教授は、19世紀中葉のアメリカ・ロマン主義文学の意味付けを考察している。島

田真杉助教授は、第2次世界大戦とその前後の時期のアメリカ現代史を研究領域とする。前川玲子助教授は、20世紀アメリカ批評、およびアメリカ知識人研究を専門領域としている。水野尚之助教授は、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのアメリカの文学と文化を主たる研究領域とする。レオン(J. Leon)外国人教師は、20世紀前半の英米文学・文化の研究を専門とし、文学と科学ならびにテクノロジーとの関係に関心を持っている。

第3項 基礎科学科

科学は、言語を媒介とした人間特有の知的営為から生まれ、事物を客観的に認識する体系として存在すると同時に、その際立った理論性と抽象性を通じてそれ自身の内発的な運動の論理を形成している。これにより科学は、技術の進歩と相まって近代世界の発展に対して独自の枠組みを与え、その飛躍的な発展の基礎となってきた。本学科は、このような観点から、現代の自然科学の方法と知見を、その個別的基礎研究の営為に立脚しつつ総合的に展開運用する。さらに基礎科学それ自体に対して、その構造と機能、その展開の特徴と法則性といった原理的視点から反省を加え、同時に数理科学・情報科学・物理科学における基礎理論の発展の独自性と先見性を視野に入れつつ、科学研究に飛躍的展開をもたらし得る研究・教育の可能性を探究する。

1. 数理基礎論講座

個々の対象および関係の数理的考察から始まった数学の研究は、その成果の蓄積の中から、抽象化、一般化を経て、代数、幾何、解析という枠を超えた総合的統一的視点を獲得してきた。これにより、個々の事実の本質の明快的な把握が得られるばかりでなく、より広範な対象および現象の考察にも強力な武器が与えられる。本講座では、このような現代的視点に立って、数理現象を記述、考察し、理解することを目指し、その基本的な方法を、諸科学との関連をも考慮して、従来の枠を超えた総合的視野に立って講究する。

第1章 総合人間学部

a 数理構造論分野

数理構造の把握の歴史的発展を考察し、個々の現象の解析から主としてその代数構造、論理構造、解析構造の理解のより統一的視点の獲得と、その成果の関連諸科学への応用について講究する。

秋葉知温教授は、可換環数を専攻する。山内正敏教授は、保型関数と関連した整数論を研究している。加藤信一助教授は、半単純代数群を研究している。吉野雄二助教授は、環論を専攻し、代数的もしくは解析的の特異点の局所環が持つ表現的性質に興味がある。

b 数理現象論分野

種々の自然現象、社会現象の主として解析的手法を用いた数学的な記述、および解析を目指し、大量の情報の分析による一般的原理の解明と、その原理の他の現象の研究への応用について講究する。

武内章教授は、多変数関数論を専攻する。宮本宗實教授は、確率論を専攻する。河野敬雄教授は、確率論を専攻する。島田三郎助教授は、一変数関数論を専攻する。西和田公正助教授は、偏微分方程式を専攻する。松本敏彦助教授は、リー群論を専攻する。西山享助教授は、リー群論、リー(超)群代数論を専攻する。

c 空間現象論分野

数学に現れる抽象的な空間における現象のみでなく、力学系におけるカオス、フラクタルなど、物理学、生物学等の関連諸科学に現れる空間における種々の現象の数学的手法による解析について講究する。

旦代晃一教授は、微分幾何学を専攻する。岩井齊良教授は、ホモロジー代数数学を専攻する。今西英器教授は、多様体上の幾何学的構造を微分位相幾何学見地に立って研究している。上田哲生助教授は、多変数複素解析学を専攻する。行者明彦助教授は、代数群の表現論を研究している。上正明助教授は、低次元多様体のトポロジー、特に4次元多様体の構造を中心に研究している。

2. 情報科学論講座

情報処理技術の革新に伴って展開した高度情報化社会に柔軟に対応でき、その環境を積極的に生かせる能力を備えた人材を育成することを主眼とする。工学的な展開に隠された人間的な情報処理の側面、情報の論理構造の基礎的な側面などに注目し、情報処理技術の人間活動への展開に力点を置く。具体的内容を列挙すると以下のようにまとめられる。

- (1) 人間による情報の認識とその処理についての総合的理解。
- (2) 情報とその処理の理論的基礎付け。
- (3) 情報科学の数理的側面の解明。
- (4) 「情報」という視点からの新しいアプローチ。
- (5) 科学・文化に与えつつある計算機のインパクトの理解。
- (6) 「情報」の視点から見た数学、物理学、心理学、言語学の新しい展開。
- (7) 計算機を用いた新しい学問の展開。
- (8) 計算機による人間の創造能力・思考能力の新しい発展。
- (9) 計算機のマン・マシン・インターフェイスの開発への寄与。
- (10) 情報ネットワーク環境下の学問・文化・社会の展開への理解。
- (11) グローバルな情報化の展開を支える、パーソナルコミュニケーションの支援(文書作成、電子メール、データベース、情報伝達・交換など)。
- (12) マルティメディアへの活用とその展開。

以上の幅広い分野をカバーするため、本講座には数理情報論分野、人間情報論分野および計算理学分野の3分野が存在し、それぞれのアイテムを分担・協力しつつ教育に当たる。

a 数理情報論分野

情報科学の数理的側面に重点を置いて、次のような点を目標とする。数学・論理学を基礎とする情報科学と計算機科学の数理論的取り扱い、数値解析の諸問題、計算機を媒介とする数学の諸理論の解析。

笠原皓司教授は、線型偏微分方程式を研究している。畑政義助教授は、カ

第1章 総合人間学部

オスやフラクタルなどの非線形特有の現象を研究している。高崎金久助教授は、数理科学全体に広く目を向けた数学の研究のあり方を模索している。櫻川貴司助教授は、計算機科学を専門分野とする。

b 人間情報論分野

人間の情報処理の側面、特に認知、学習、言語、発達、社会的行動等を情報科学的に分析する能力を身につけることを目指す。また今日の高度情報化社会において、人間と社会が直面する諸問題についても多角的に考察する。

山梨正明教授は、日常言語の文法と意味構造の体系的な記述とその数理的な形式化の研究を行っている。杉万俊夫助教授の専門領域は、社会心理学、特に、グループ・ダイナミックスである。北山忍助教授は、認知・社会・文化心理学的観点から研究している。河崎靖助教授は、言語普遍性、言語類型論の立場から「ことば」に表れた諸現象について考察する研究を行っている。竹本篤史助手の主たる研究領域は、知覚現象の実験心理学である。

c 計算理学分野

分野としての教育方針は、創造的な仕事や思考の発想・展開の道具として計算機を自由に駆使できる能力の育成、計算機を用いた理学の展開に重点を置いた教育、自然現象理解における計算機の役割についての理解の深化である。

川崎辰夫教授は、計算物理学を専門としている。富田博之教授は、非可逆現象の統計物理学的研究を行っている。

3. 自然構造基礎論講座

自然の探究において最も基礎的・一般的である物理科学研究の営みは、自然界を支配する基本法則を探る過程で、素粒子の超ミクロの階層から多様な物質の巨視的階層、そして宇宙の超マクロの階層まで、より基本的な原理を求めて次々とその豊かな階層的構造を明らかにしてきた。本講座では、かくとらえられてきた自然の諸階層を再び有機的・総合的にとらえ、それらを支配する基本法則・基本原理を統一的視点から追究して、現代基礎科学の新し

い展開に寄与する。数理解物理的基礎理論研究と物性科学研究の諸分野における現代的方法を総合して、素粒子の相互作用、宇宙の進化など自然の存在様式の統一的把握や、粒子集合体としての物質の新しい物性や機能を探究する課題に取り組む。

a 粒子・宇宙基礎論分野

自然界の持つ素粒子から宇宙にわたる多様な階層を、それらを律する法則性の原理的関連という普遍的立場からとらえ直し、素粒子物理学、宇宙物理学、数理解物理学等の各分野の個別独立的研究を、有機的に結び付けることにより、統一的な視点から自然界の基本法則と基本原理およびその発現のメカニズムを究明する。

松田哲教授は、重力を含む素粒子相互作用の大統一理論として注目される超弦理論の共役代数的構造の研究を行っている。植松恒夫教授は、自然界の4つの力である弱、電磁、強および重力相互作用を統一する上で重要と考えられる超対称性について研究している。青山秀明助教授は、弱電磁理論で予測されるバリオン数とレプトン数の非保存過程について、高エネルギー加速器での実現の可能性を中心に研究している。石原秀樹助教授は、一般相対論と量子力学を基礎に、初期宇宙やブラックホールの時空構造とその進化を研究している。早田次郎助教授は、様々な重力理論を用いて宇宙構造の多様性を研究している。

b 物性基礎論分野

現代の物質科学研究は自然に存在する諸物質の物性の解明とその応用に止まらず、これまでにはない機能を持つ新しい物質相を人工的に創り出す課題にも及びつつある。このような状況を踏まえ、多様な物質諸相の物性と構造特性の相関や、物質の力学的、電気的、磁氣的、光学的諸機能を支配する素過程とその協力効果の究明を、個別物性、個別手法の枠を超えた総合的視点に基づいて進め、物質科学の新しい展開を探る。

越野茂美教授、林哲介教授、大島トキ子助手、渡邊雅之助手のグループは、主として、紫外線から可視光の領域で、光と物質との相互作用、すなわ

第1章 総合人間学部

ち、光を物質に照射したとき起こる現象を対象として研究を行っている。毛利明博教授、湯山哲守助手、道下敏則助手、田中仁助手のグループは、プラズマ基本物性・粒子ビーム・核融合を対象として、非中性プラズマである電子雲の非線形挙動やエコー、極低温凝縮プラズマの形成とその特性、対向ビームによるD-He³核融合等の実験・解析を行っている。宮本嘉久助教授、深尾浩次助手のグループは、高分子および鎖状有機分子の構造と物性についての研究を行っている。武末真二助教授は、統計力学の力学的基礎付けを目指し、大自由度力学系の微視的力学の性質と巨視的統計性との関連について研究している。川合葉子助手は、19世紀以後の、物理学の個別研究の発展過程や、その制度的技術的側面の分析を行っている。

第4項 自然環境学科

近代科学は、人間を取り巻く自然環境の中に合理性を発見することから始まったといえる。それは天体の運動の解明であったり、物質の根源を探ることであったり、また生物界の進化あるいは生体の機能を解明することなどであった。これら諸科学が自然環境を認識、理解するためにとった手段の多くは、対象を要素に分割し、要素自身の機能の究明や要素間の関係(法則)を明らかにすることであった。しかし、今日の自然環境は、もはや人間の外にある研究対象に止まらず、人間自身をも含めた複合システム、さらには地球環境と人間との運命共同体という認識を要求するようになってきた。これには、人間が環境に対して働きかけをしてきた結果として生じている、地球・生物環境全体の質的変化もしくはその崩壊につながる危機意識が根底にある。自然環境のかかる事態を迎えて、人間には何ができるか、何をなすべきかが今問われている。

本学科では、上記の諸問題を解決するため、このような自然の環境システムの部分構造(サブシステム構造)はもとより、その全体構造の把握に努めると同時に、サブシステム間の相関関係、相互作用などを究明する。これによ

り、自然環境というシステム総体の運動を調べ、かつこれが平衡を保つための解を求める。併せて、究極的には環境の変化から逃れられない人間の、環境変化への適応性や生涯にわたる健康保持の諸条件について研究・教育する。

1. 物質環境論講座

人間を取り巻く環境には様々な天然物質や人工物質が存在し、人間はそれらと関わりながら生活している。それらは人間にとって必要不可欠のものであったり、有害無益なものであったりする。それらの物質は固有の機能を持つとともに、自然界のいろいろな要因によってその構造を変え、変化していく動的な側面を持つ。

本講座では、自然界に存在する種々の無機および有機化合物ならびに生体分子の微視的構造と、それらの持つ様々な機能との関連を究明することにより、環境と調和する有用な物質をデザインし、創り出す方法を研究していく。また生体系も含めた化学反応のメカニズムを解明し、その制御法を確立することにより、無用な物質を副生することなく目的の化合物をつくる方法を開発する。一方、地球上の自然環境における種々の元素や化合物の分布・循環の様子を調べ、化学的な立場から自然の全体構造および動態を解明する。さらには、人間が直面しつつある地球環境の悪化を防ぐため、新しい機能を持つ材料を設計するとともに、新しいエネルギー源の開発や資源の循環利用に関する研究を進める。このような研究を通じて、われわれを取り巻く環境の中の物質およびその生体に与える影響に対して正しい認識を持ち、豊かな創造性を有する人間を育成することを目指す。

a 物質構造論分野

本分野では、物質の微視的構造を明らかにし、その構造と物質の性質・機能との関連を究明する。また、自然環境における物質の動的変化について、物質の構造と関連付けて考察する。さらに環境における物質の循環・動態を詳細に分析・把握し、地球環境保全のために効果的な手法を探索する。資源

第1章 総合人間学部

やエネルギーの問題についても、物質の構造・性質・変化といった観点に立って、その解決のための基礎を構築する。

片桐晃教授は、電気化学を専門とし、電解槽や電池における電流分布の解析などの研究を行っている。村中重利教授は、準安定相の酸化物の化学組成、結晶構造および物性等について研究している。馬場正昭助教授は、レーザー分光やESR(Electron Spin Resonance、電子スピン共鳴)の実験手段を用いた分子の励起状態の研究を行っている。杉山雅人助教授の研究領域は、地球化学および分析化学であり、水圏における物質循環の機構について研究を進めている。鞭享助手は、熔融塩における金属の平衡挙動の研究を進めている。松原孝治助手は、物質の構造や機能と分光学的応答との関連性について解明することを課題にしている。田部勢津久助手の専門は、無機材料化学である。

b 物質機能論分野

本分野では、自然界に存在する物質の機能とその構造との関連を解析し、それを基盤として環境との調和を乱さない有用な機能あるいはより優れた機能を持つ人工物質や材料を設計し、創製する方法を研究する。また物質反応の本質を解明し、その制御法を考究するとともに、新たな物質変換系の開発を追究する。さらに生体の持つ優れた機能に注目し、その解明を図り、新材料開発の指針となる原理を探る。

児嶋眞平教授は、有機金属化合物を反応試剤として用いる新しい有機合成反応を開発する研究を行っている。大谷晋一教授は、単糖誘導体の合成を中心テーマとし、単糖の反応、構造を考察している。豊島喜則教授は、植物の光合成初期過程をつかさどる光化学系複合体の構造と機能および自己調節の分子機作の究明、複合体を構成する蛋白質の発現と複合体形成機構の解明を目指している。花田禎一教授は、無機材料化学を専門とし、非晶質材料の物性と構造に関する研究を行っている。山口良平教授は、有機金属化合物の反応特性を活用した高選択的有機合成反応、そしてそれを利用した天然物有機化合物の高効率適合性プロセスの開発を行っている。岡與志男助教授は、新

規機能性無機材料の開発を目的として、特に水熱合成の手段を用いて、非平衡系の遷移金属複合酸化物の新物質の合成を試みている。橋本史朗助手は、糖誘導体の合成および超高压下における有機合成反応の研究を行っている。

2. 生物・地球圏環境論講座

地球上には、人間を含む動物、植物、菌類など様々な生物が共存し、生物自身が、他の生物の環境として、相互に複雑な関係を作りながら生命活動を営んでいる。本講座では、そうした人間を含む有機的生物環境を一体としてとらえ、それが成立する法則性を探りながら、さらに未来への持続可能な生物環境のあり方を考察していくと同時に、これら生物の存在の基盤である地球環境を、単に現在の地球環境の動態解明に止まらず、長い時間軸上にわたる変化を持つシステムととらえ、地球環境の総合的な理解を目指す。

a 地球科学分野

固体地球とその上に広がる大気や海洋を含む地球環境の現状を力学的および解析的手法を用いて明らかにするとともに、様々な地質体に記録された過去の地球環境の変遷を読み取ることにより、環境変化の本質的な解明を目指す。

酒井敏助教授は、海洋物理学が専門である。巽好幸助教授は、岩石学が専門である。石川尚人助手は、古地磁気学が専門である。大倉敬宏助手は、地震学が専門である。

b 生物科学分野

本分野では、遺伝子、細胞とその社会などのミクロ的な視点と、種の変異と適応、動物、植物、菌類の自然史などマクロ的な視点から生命と環境の関わりを解明し、生物的自然の構成員としての人間の活動のあり方を生物科学の立場から提示する。

小林恒明教授は、哺乳類を中心とした系統分類学・生物地理学を専門とする。丸山圭藏教授は、走査電子顕微鏡による細胞内超微細構造の観察を専攻している。戸部博教授は、植物分類学・形態学を専門とする。加藤真助手

第1章 総合人間学部

は、植物や昆虫、海産無脊椎動物などの進化・生態学を専攻している。永益英敏助手は、系統分類学および植物地理学を専門とする。幡野恭子助手は、植物細胞の形態形成に関する研究を行っている。

3. 環境適応論講座

近年のライフサイエンス(生命科学)の発展は、目を見張るものがある。しかしその尖鋭化・専門化が進むとともに、近接の分野の成果さえも理解できないような隔絶化の事態が生じている。無批判な研究の推進は、環境破壊や生命倫理の問題に必ず跳ね返ってくることになる。現在、幅広い知識を持った、批判的精神を養えるような教育が強く求められている。

本講座の目的は、ライフサイエンスに関する専門教育を行うと同時に、従来の理系文系の分類枠にとらわれない幅広い観点から、人間をとらえることのできる人材を養成する点にある。本講座は、自然的・人工的環境における人間の身体的・心理的適応能力とその限界を、ライフサイエンスの立場から分析するとともに、人間の生存と調和した環境条件の解明、人間の諸機能を維持、向上させる方法の解明を目指す。そのために本講座には、生体適応論と運動適応論の2分野を設けている。しかし統合的なライフサイエンスの推進を目指す本講座にとって、この両分野にまたがる研究領域が存在するのも当然である。例えば、神経科学の研究領域は、生体適応論分野の環境適応論・生体適応論・環境生理学、運動適応論分野の運動学習論・運動制御論などである。

a 生体適応論分野

現代人を取り巻く様々な環境が、人間の発達・成人病の発症・老化、さらに恒常性などに及ぼす影響をライフサイエンスの立場から分析する。これらの分析を通じて、人間の生存と尊厳、健康を守るための処方策を考察する。

八木保教授は、児童期・青年期の人たちを対象に身体形態・体力の測定と生活環境の調査を行い、両者の関連を検討している。中村榮太郎教授は、体力の老化現象について研究している。小林茂夫助教授は、ラット視床下部ス

ライス中の温度受容ニューロンをパッチクランプ記録し、温度受容チャネルを解析している。津田謹輔助教は、成人病について遺伝と食事・運動など環境要因の関わりを中心に研究している。田中真介助手は、遺伝子異常によって重度発達障害が発生する仕組みを調べている。

b 運動適応論分野

人間は、身体活動を通じて環境に働きかける。その実践は人間に生理的・心理的作用を引き起こし、人間行動の変容を促す。本分野では、身体活動が人間の身体に及ぼす影響を、ライフサイエンスの手法で解明する。

松村道一助教授は、中枢神経系における行動発現と随時運動の制御メカニズムを解析している。船橋新太郎助教授は、運動スキルの形成に至る運動学習を「学習」のモデルとして用い、その形成に関与する脳内機構の神経生理学的研究を行っている。石原昭彦助教授は、脊椎運動ニューロンと筋繊維の組織化学的研究を行っている。小田伸午助教授は、ラクビーで用いる動作の力学的解析を進めるとともに、実際のコーチングを行い、理論的資料と実践的指導との関連について考察している。林幸信助手は、陸上競技各種目の力学的研究を行っている。